

令和3年度 全国学力・学習状況調査の結果について

1. 調査の目的(実施主体:文部科学省)

義務教育の機会均等とその水準の維持の観点から、全国的な児童生徒の学力や学習状況を把握・分析し、教育施策の成果と課題を検証し、その改善を図るとともに、学校における児童生徒への教育指導の充実や学習状況の改善等に役立てる。さらに、そのような取組を通じて、教育に関する継続的な検証改善サイクルを確立する。

2. 調査の対象とする児童生徒

【小学校調査】 小学校第6学年

【中学校調査】 中学校第3学年

3. 調査事項及び手法

a. 教科に関する調査(国語、数学):国語、数学はそれぞれ次の (i), (ii)を一体的に出題。

- i. 身につけておかなければ後の学年等の学習内容に影響を及ぼす内容や、実生活において不可欠であり常に活用できるようになっていることが望ましい知識・技能等
- ii. 知識・技能を実生活の様々な場面に活用する力や、様々な課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力等

b. 質問調査

学習意欲、学習方法、学習環境、生活の諸側面等に関する質問紙調査を実施。本年度の主な調査項目は以下の通り。

- 挑戦心、達成感、規範意識、自己有用感等
- ICTを活用した学習状況
- 主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善に関する取組状況
- 学習に対する興味・関心や授業の理解度等
- 新型コロナウイルス感染症の影響

4. 各教科の調査結果の概要について

国語が84%、数学が74%となっており、両教科、全国平均と比較し、平均正答率は国語で約20ポイント、数学で17ポイント上回る結果となった。また平均正答率(全国比)は、国語で1.30、数学で1.29となっている。以上のことから、いずれの教科においても、基礎的な知識・技能、それらを活用する力、課題解決のための構想を立て実践し評価・改善する力をおおむね身に付けることができていると考えられる。平均無解答率は、国語で0.0%(全国平均4.4%)、数学で1.2%(全国平均11.2%)となっており、最後まであきらめず、粘り強く考え答えを導き出そうとしていることが窺える。

また、問題の形式として、「選択式」、「短答式」、「記述式」の3つが挙げられ、すべての問題形式の正答率において、全国平均を上回っているが、特に記述式問題の正答率は、国語で80.9%(全国平均56.0%)、数学で61.5%(全国平均35.0%)となっており、全国平均をはるかに上回る結果となっている。その点、問題の意図を理解し、自らの考えや意見を論理的にまとめ、適切に表現する力がおおむね身につけていると考えられる。

国語では、問題の領域として、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の4つに分けられ、すべての領域において全国平均を20%以上上回る結果となっているが、特に「読むこと」においては、全国平均を約32%上回っている。

数学では、問題の領域として、「数と式」、「図形」、「関数」、「資料の活用」の4つに分けられ、「図形」の領域においては、全国平均を約28%上回っており、図形の問題を得意と

する傾向がある一方で、「資料の活用」では、全国平均をわずかに7%上回るのみとなっている。「図形」と「関数」においては、全国平均を約20%上回るにとどまっている。数学の結果全体として、特段正答率が低いわけではないが、「資料の活用」の領域において、苦手意識を持っている生徒が多いと言える。

5. 生活や学習状況の調査結果の概要について

次に、生活習慣や学習に関する質問紙項目の中から、本校の学校目標や特色ある取組等に関連するであろう項目をいくつか取り上げ、大阪市平均や全国平均と比較しながら、本校の生徒の状況や特徴を分析する。なお、前提として全国学力・学習状況調査の統計から得られるデータは男女を合わせたものになっているが、本校第3学年生徒の男女比は、1:3となっている点に留意しながら、結果を概観していきたい。

就寝時間と起床時間が日によって異なると生徒の割合が、大阪市、全国平均と比較し、多くなっている。その理由として、下記の点が考えられる。コロナ渦において、登校せずにオンライン授業を実施していた点、習い事をしている生徒の割合が多い点、オンラインで出される宿題、課題が日によって異なっている点などが挙げられるであろう。

また、授業におけるICT機器の活用に関する質問については、全国平均を大幅に上回り、全国と比較しても、昨年度より先進的にオンライン授業に取り組み、生徒教員間だけでなく、生徒間での双方向でのコミュニケーションを取り入れた授業を実施してきたことが窺える。

言語活動に関わる質問においても総じて高い結果が得られている。新しい学習指導要領では、「生きる力をはぐくむことを目指し、基礎的・基本的な知識及び技能を習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等をはぐくむとともに、主体的に学習に取り組む態度を養うためには、言語活動を充実すること。」としており、各教科等において、言語活動を充実させることが求められている。そこでは特に、事実等を正確に理解し、他者に的確に分かりやすく伝えること、事実等を解釈し説明するとともに、互いの考えを伝えあうことで、自分の考えや集団の考えを発展させること、互いの存在についての理解を深め、尊重していくこと、感じたことを言葉にしたり、それらの言葉を交流したりすることを意識し、各教科での教育活動に臨まなければならない。その点、言語活動に関わる多様な観点において、全国平均を大幅に上回る結果となっている。またクロス分析の結果、それらの観点において肯定的に回答している生徒は、国語、数学の結果も高くなっており、因果関係が認められるようである。

一方、「自分でやると決めたことは、やり遂げるようにしているか」、「難しいことでも、失敗を恐れなくて挑戦しているか」という質問に対して、肯定的に答えた生徒の割合は、大阪市、全国平均と比較し、少なくなっている。その理由として、部活動が盛んではない点、コロナ渦により行事がほぼ実施できていない点などが挙げられるであろう。しかしながら、生徒のGRITと呼ばれるやり抜く力、レジリエンスと呼ばれる困難に打ち勝つ力、困難から立ち上がる力が、相対的に低いと肌感覚で感じている教員が多いことも事実である。

6. 所感

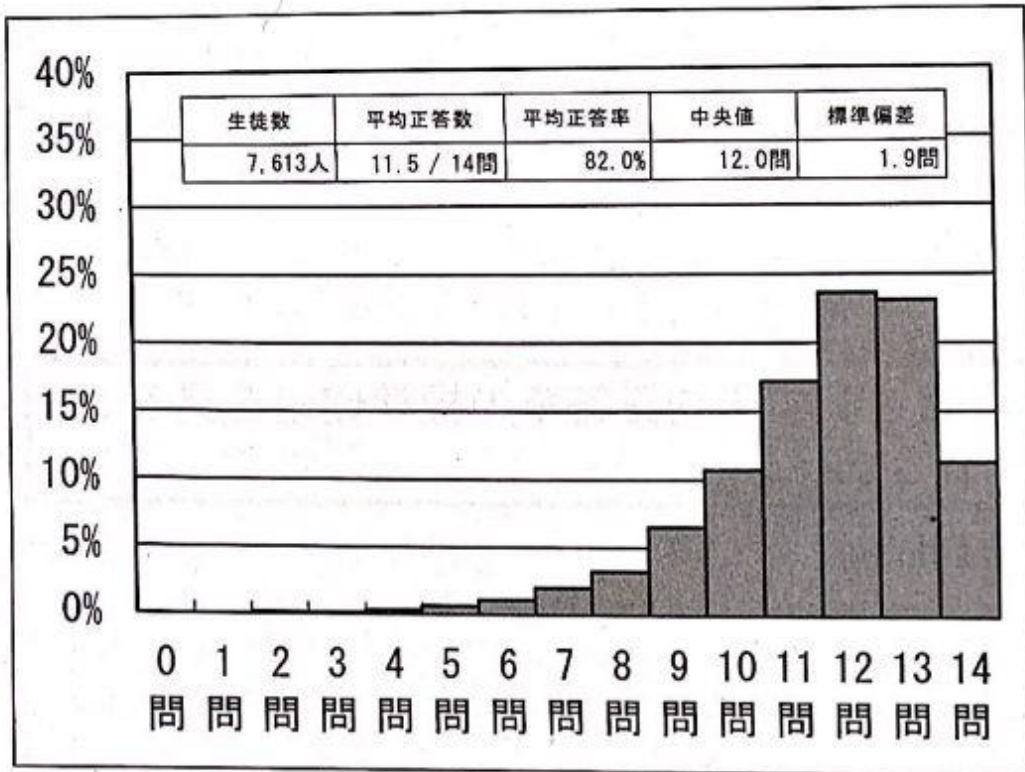
国語と数学のみではあるが、中学校の教育課程における基礎的な知識・技能は定着していると言える。それぞれの教科における国立や私立のデータ(下記添付)を見ると、国立の成績が大幅に私立の平均を上回っているが、その国立の平均正答率を本校の国語は2ポイントさらに上回っている(数学は、5ポイント下回っている)。国語の勉強が好きと回答する生徒も多く、授業を通して、生徒の国語力が育まれていると考えられる。

一方、数学は大半を英語で教授しているにも関わらず、そこまで結果は悪くないと言えるが、国語と比較すると結果は芳しくない。特に論理的な言語活動を必要とする、資料の活用の部分において、課題が見られるが、今後単元により、英語で教授する部分と日本語で教授する部分を分けるのも一つの手段かもしれない。

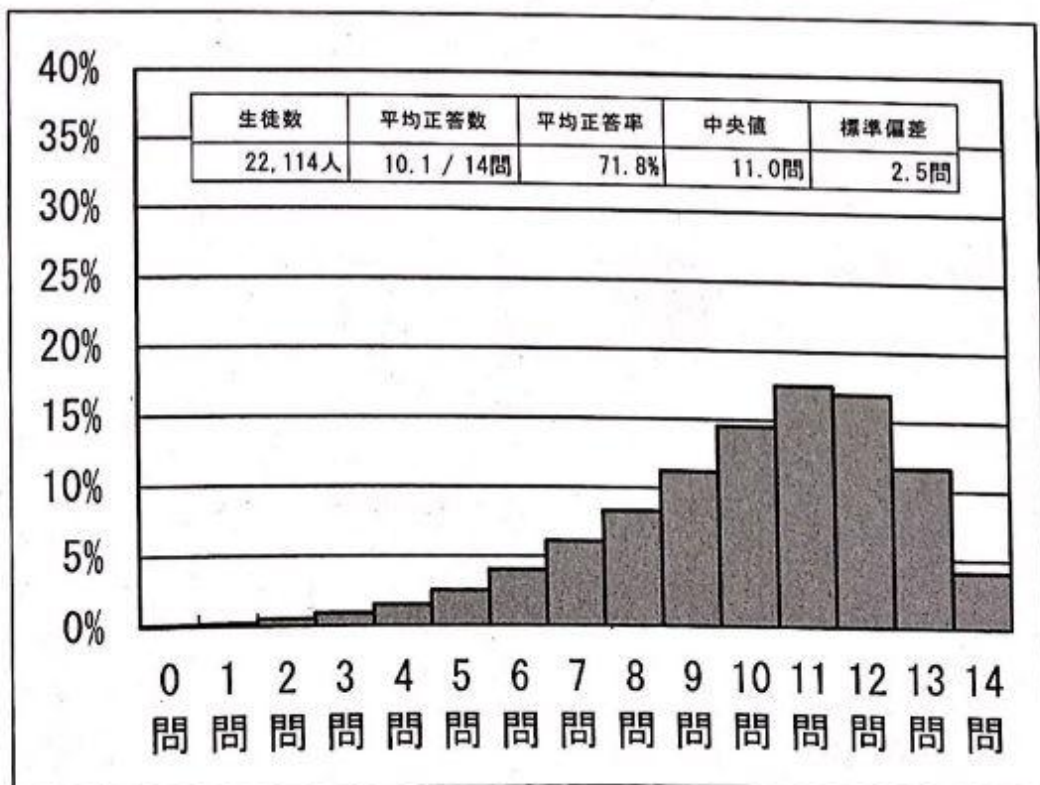
質問用紙の回答から、生徒の一番の課題として、GRITやレジリンスと呼ばれる力が相対的に低いということが挙げられる。理不尽な教育活動を行う必要はないが、理不尽と感じる場面、リスクを冒して課題に挑戦する場面を設け、それらを乗り越えていく力を育む取り組みについても意識的に行っていく必要があると感じる。

国語

<国立> 正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：生徒の割合）

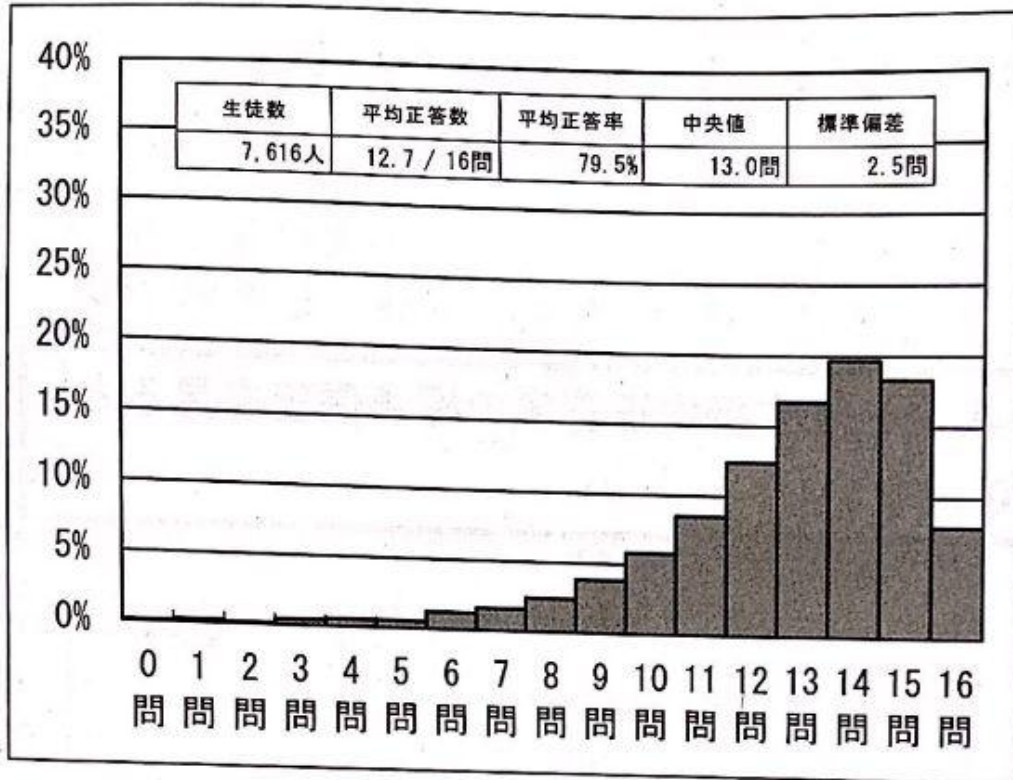


<私立> 正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：生徒の割合）



数学

<国立> 正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：生徒の割合）



<私立> 正答数分布グラフ（横軸：正答数，縦軸：生徒の割合）

